校異源氏物語・みのり

むらさきのうへいたうわつらひ給し御心ちの後いとあつしくなり給てそこはかとなくなやみわたり給ことひさしくなりぬいとおとろ　くしうはあらねとゝし月かさなれはたのもしけなくいとゝあえかになりまさり給へるを院のおもほしなけく事かきりなしゝはしにてもをくれきこえ給はむことをはいみしかるへくおほし身つからの御こゝちにはこの世にあかぬことなくうしろめたきほたしたにましらぬ御身なれはあなかちにかけとゝめまほしき御いのちともおほされぬをとしころの御契かけはなれ思なけかせたてまつらむ事のみそ人しれぬ御心の中にも物あはれにおほされける後の世のためにとたうとき事ともをおほくせさせ給つゝいかてなをほいあるさまになりてしはしもかゝつらはむ命のほとはをこなひをまきれなくとたゆみなくおほしの給へとさらにゆるしきこえ給はすさるはわか御心にもしかおほしそめたるすちなれはかくねんころに思給へるついてにもよをされておなしみちにもいりなんとおほせとひとたひ家をいて給なはかりにもこの世をかへりみんとはおほしをきてす後の世にはおなしはちすのさをもわけんと契かはしきこえ給てたのみをかけ給御中なれとこゝなからつとめ給はんほとはおなし山なりともみねをへたてゝあひみたてまつらぬすみかにかけはなれなん事をのみおほしまうけたるにかくいとたのもしけなきさまになやみあつい給へはいと心くるしき御ありさまをいまはとゆきはなれんきさみにはすてかたく中　く山水のすみかにこりぬへくおほしとゝこほるほとにたゝうちあさえたるおもひのまゝの道心おこす人ゝにはこよなうをくれ給ぬへかめり御ゆるしなくて心ひとつにおほしたゝむもさまあしくほいなきやうなれはこのことによりてそ女君はうらめしく思きこえ給ける我御身をもつみかろかるましきにやとうしろめたくおほされけりとしころわたくしの御くはんにてかゝせたてまつり給ける法花経千部いそきてくやうし給わか御殿とおほす二条院にてそし給ける七そうのほうふくなとしな　くたまはすものゝいろぬいめよりはしめてきよらなることかきりなしおほかたなに事もいといかめしきわさともをせられたりこと　くしきさまにもきこえ給はさりけれはくはしき事ともゝしらせ給はさりけるに女の御をきてにてはいたりふかくほとけのみちにさへかよひ給ける

御心の程なとを院はいとかきりなしとみたてまつり給てたゝおほかたの御しつらひなにかのことはかりをなんいとなませ給ける楽人舞人なとのことは大将の君とりわきてつかうまつり給うち春宮后の宮たちをはしめたてまつりて御かた
　くこゝかしこにみす経ほうもちなとはかりのことをうちし給たに所せきにましてそのころこの御いそきをつかうまつらぬ所なけれはいとこちたきことゝもありいつのほとにいとかく色　くおほしまうけゝんけにいそのかみの世ゝへたる御くわんにやとそみえたる花ちる里ときこえし御かたあかしなともわたり給へりみなみひんかしのとをあけておはしますしん殿のにしのぬりこめ也けり北のひさしにかた　くの御つほねともはさうしはかりをへたてつゝしたり三月の十日なれは花さかりにて空のけしきなともうらゝかにものおもしろく仏のおはすなる所のありさまとをからすおもひやられてことなりふかき心もなき人さへつみをうしなひつへしたきゝこるさむたんのこゑもそこらつとひたるひゝきおとろ　くしきをうちやすみてしつまりたるほとたにあはれにおほさるゝをましてこのころとなりてはなに事につけても心ほそくのみおほしゝるあかしの御かたに三の宮してきこえたまへる
　おしからぬこの身なからもかきりとてたきゝつきなんことのかなしさ御かへり心ほそきすちは後のきこえも心をくれたるわさにやそこはかとなくそあめる
　たきゝこる思ひはけふをはしめにてこの世にねかふのりそはるけき夜もすからたうときことにうちあはせたるつゝみのこゑたえすおもしろしほの　くとあけゆくあさほらけ霞のまよりみえたる花の色　くなを春に心とまりぬへくにほひわたりてもゝ千とりのさへつりもふえのねにをとらぬ心地してものゝあはれもおもしろさものこらぬほとにれうわうのまいてきうになるほとのするつかたのかくはなやかににきはゝしくきこゆるにみな人のぬきかけたるものゝ色いろなとも物のおりからにおかしうのみゝゆみこたちかんたちめの中にもものゝ上すともてのこさすあそひ給かみしも心ちよけにけうあるけしきともなるをみ給にものこりすくなしと身をおほしたる御心のうちにはよろつの事あはれにおほえ給きのふれいならすおきゐ給へりしなこりにやいとくるしうしてふし給へりとしころかゝる物のおりことにまいりつとひあそひ給人　くの御かたちありさまのをのかしゝさへともことふえのねをもけふやみきゝ給へきとちめなるらむとのみおほさるれはさしもめとまるましき人のかほともゝあはれにみえわたされ給まして夏冬のときにつけたるあそひたはふれにもなまいとましきしたの

心はをのつからたちましりもすらめとさすかになさけをかはし給かた　くはたれもひさしくとまるへき世にはあらさなれとまつわれひとりゆくゑしらすなりなむをおほしつゝくるいみしうあはれなりことはてゝをのかしゝかへり給なんとするもとをきわかれめきておしまる花ちるさとの御かたに

たえぬへきみのりなからそたのまるゝよゝにとむすふ中の契を御かへり

むすひをくちきりはたえし大方のゝこりすくなきみのりなりともやかてこのついてにふたんのと経せんほうなとたゆみなくたうとき事ともせさせ給みすほうはことなるしるしもみえてほともへぬれははれいのことになりてうちはへさるへき所　く寺　くにてそせさせ給ける夏になりてはれいのあつさにさへいとゝきえ入給ぬへきおり　くおほかりそのことゝおとろおとろしからぬ御心ちなれとたゝいとよはきさまになり給へはむつかしけに所せくなやみ給こともなしさふらふ人　くもいかにおはしまさむとするにかとおもひよるにもまつかきくらしあたらしうかなしき御ありさまとみたてまつるかくのみおはすれは中宮この院にまかてさせ給ひんかしのたいにおはしますへけれはこなたにはたまちきこえ給きしきなとれいにかはらねとこのよのありさまをみはてすなりぬるなとのみおほせはよろつにつけてものあはれなりなたいめんをきゝ給にもその人かの人なとみゝとゝめてきかれ給ふかんたちめなといとおほくつかうまつり給へりひさしき御たいめんのとたえをめつらしくおほして御物かたりこまやかにきこえ給院いりたまひてこよひはすはなれたる心ちしてむとくなりやまかりてやすみはへらんとてわたり給ぬおきゐたまへるをいとうれしとおほしたるもいとはかなきほとの御なくさめなりかた　くにおはしましてはあなたにわたらせ給はんもかたしけなしまいらむことはたわりなくなりにてはへれはとてしはらくはこなたにおはすれはあかしの御かたもわたり給てこゝろふかけにしつまりたる御ものかたりともきこえかはし給うへは御心のうちにおほしめくらす事おほかれとさかしけになからむのちなとのたまひいつることもなしたゝなへてのよのつねなきありさまをおほとかにことすくなゝる物からあさはかにはあらすのたまひなしたるけはひなとそことにいてたらんよりもあはれに物こゝろほそき御けしきはしるうみえける宮たちをみたてまつりたまうてもをの　くの御ゆくすゑをゆかしく思きこえけるこそかくはかなかりける身をおしむ心のましりけるにやとて涙くみ給へる御かほのにほひいみしうおかしけなりなとかうのみおほしたらんとおほすに中宮うちなき給ひぬゆゝしけになとはきこえなし給はすものゝついてなとにそとしころつかうまつりなれたる人　くのことなるよるへ

なういとおしけなるこの人かの人はへらすなりなんのちに御心とゝめてたつねおもほせなとはかりきこえ給けるみと経なとによりてそれいのわか御かたにわたり給三宮はあまたの御中にいとおかしけにてありき給を御心ちのひまにはまへにすゑたてまつり給て人のきかぬまにまろかはへらさらむにおほしいてなんやときこえ給へはいと恋しかりなむまろはうちのうへよりも宮よりもはゝをこそまさりて思きこゆれはおはせすは心ちむつかしかりなむとてめおしすりてまきらはし給へるさまおかしけれはほゝゑみなから涙はおちぬおとなになり給ひなはこゝにすみ給てこのたいのまへなるこうはいとさくらとは花のおり　くに心とゝめてもてあそひ給へさるへからむおりは仏にもたてまつり給へときこえ給へはうちうなつきて御かほをまもりてなみたのおつへかめれはたちておはしぬとりわきておほしたてまつり給へれはこの宮とひめ宮とをそみさしきこえ給はんことくちおしくあはれにおほされける秋まちつけて世中すこしすゝしくなりては御心ちもいさゝかさはやくやうなれと猶ともすれはかことかましさるは身にしむ許おほさるへき秋かせならねと露けきおりかちにてすくし給中宮はまいり給なんとするをゐましはしは御らむせよともきこえまほしうおほせともさかしきやうにもありうちの御つかひのひまなきもわつらはしけれはさもきこえ給はぬにあなたにもえわたり給はねは宮そわたり給けるかたはらいたけれとけにみたてまつらぬもかひなしとてこなたに御しつらひをことにせさせ給こよなうやせほそり給へれとかくてこそあてになまめかしきことのかきりなさもまさりてめてたかりけれときしかたあまりにほひおほくあさ　くとおはせしさかりは中　くこのよの花のかほりにもよそへられ給しをかきりもなくらうたけにおかしけなる御さまにていとかりそめに思給へるけしきにる物なく心くるしくすゝろにものかなし風すこく吹いてたるゆふ暮にせむさいみ給とてけうそくによりゐ給へるを院わたりてみたてまつり給ひてけふはいとよくおきゐ給めるはこのおまへにてはこよなく御心もはれ　くしけなめりかしときこえ給かはかりのひまあるをもいとうれしとおもひきこえ給へる御けしきをみ給も心くるしくつゐにいかにおほしさはかんと思にあはれなれは

　をくとみる程そはかなきともすれは風にみたるゝ萩の上露けにそおれかへりとまるへうもあらぬよそへられたるおりさへしのひかたきをみいたし給てもやゝもせはきえをあらそふ露のよにをくれさきたつ程へすもかなとて御涙をはらひあへ給はす宮

　秋風にしはしとまらぬ露のよをたれか草はのうへとのみみんときこえかは

し給御かたちともあらまほしくみるかひあるにつけてもかくてちとせをすくすわさもかなとおほさるれと心にかなはぬ事なれはかけとめんかたなきそかなしかりけるいまはわたらせ給ひねみたり心ちいとくるしくなりはへりぬいふかひなくなりにける程といひなからいとなめけにはへりやとてみ木丁ひきよせてふし給へるさまのつねよりもいとたのもしけなくみえ給へはいかにおほさるゝにかとて宮は御てをとらへたてまつりてなく　くみたてまつり給にまことにきえゆく露のこゝちしてかきりにみえ給へはみす行のつかひともかすもしらすたちさはきたりさき　くもかくていきいて給おりにならひ給て御物のけとうたかひ給ひてよひとよさま　くの事をしつくさせ給へとかひもなくあけはつるほとにきえはて給ひぬ宮もかへり給はてかくてみたてまつり給へるをかきりなくおほすたれも　くことはりのわかれにてたくひあることゝもおほされすめつらかにいみしくあけくれのゆめにまとひ給ほとさらなりやさかしきひとおはせさりけりさふらふ女ほうなともあるかきりさらにものおほえたるなし院はましておほししつめんかたなけれは大将の君ちかくまいり給へるを御木丁の本によひよせたてまつり給てかくいまはかきりのさまなめるをとしころのほいありて思ひつることかゝるきさみにそのおもひたかへてやみなんかいと　くおしき御かちにさふらふ大とこたちと経のそうなともみなこゑやめていてぬなるをさりともたちとまりて物すへきもあらむこの世にはむなしき心ちするを仏の御しるしいまはかのくらきみちのとふらひにたにたのみ申へきをかしらおろすへきよしものし給へさるへきそうたれかとまりたるなとの給御けしき心つよくおほしなすへかめれと御かほの色もあらぬさまにいみしくたへかね御涙のとまらぬをことはりにかなしくみたてまつり給御ものゝけなとのこれも人の御心みたらんとてかくのみ物はゝへめるをさもやおはしますらんさらはとてもかくても御ほいのことはよろしきことにはへなり一日一やいむことのしるしこそはむなしからすは侍なれまことにいふかひなくなりはてさせ給て後の御くしはかりをやつさせ給てもことなるかのよの御ひかりともならせ給はさらん物からめのまへのかなしひのみまさるやうにていかゝはへるへからむと申給て御いみにこもり候へきこゝろさしありてまかてぬそうその人かのひとなとめしてさるへきことゝもこの君そをこなひ給としころなにやかやとおほけなき心はなかりしかといかならんよにありしはかりもみたてまつらんほのかにも御こゑをたにきかぬことなと心にもはなれす思わたりつるものをこゑはつゐにきかせ給はすなりぬるにこそはあめれむなしき御からにてもいまひとたひみたてまつらんの心さしかなふへき

おりはたゝいまよりほかにいかてかあらむと思ふにつゝみもあへすなかれて女はうのあるかきりさはきまとふをあなかましはしとしつめかほにて御木丁のかたひらをものゝ給まきれにひきあけてみ給へはほの　くとあけゆくひかりもおほつかなけれはおほとなあふらをちかくかゝけてみたてまつり給にあかすうつくしけにめてたうきよらにみゆる御かほのあたらしさにこの君のかくのそき給をみる　くもあなかちにかくさんの御心もおほされぬなめりかくなに事もまたかはらぬけしきなからかきりのさまはしるかりけるこそとて御袖をかほにおしあて給へるほと大将の君もなみたにくれてめもみえ給はぬをしゐてしほりあけてみたてまつるに中　くあかすかなしきことたくひなきにまことに心まとひもしぬへし御くしのたゝうちやられ給へるほとこちたくけうらにて露はかりみたれたるけしきもなうつや　くとうつくしけなるさまそかきりなきひのいとあかきに御色はいとしろくひかるやうにてとかくうちまきらはすことありしうつゝの御もてなしよりもいふかひなきさまにてなに心なくてふしたまへる御ありさまのあかぬ所なしといはんもさらなりやなのめにたにあらすたくひなきをみたてまつるにしにいるたましゐのやかてこの御からにとまらなむとおもほゆるもわりなきことなりやつかうまつりなれたる女はうなとのものおほゆるもなけれは院そなにこともおほしわかれすおほさるゝ御心ちをあなかちにしつめ給てかきりの御ことゝもし給いにしへもかなしとおほすこともあまたみ給し御身なれといとかうおりたちてはまたしり給はさりけることをすへてきしかたゆくさきたくひなき心ちし給やかてそのひとかくおさめたてまつるかきりありけることなれはからをみつゝもえすくし給ましかりけるそ心うき世中なりけるはる　くとひろきのゝ所もなくたちこみてかきりなくいかめしきさほうなれといとはかなきけふりにてはかなくのほり給ぬるもれいのことなれとあえなくいみし空をあゆむ心ちして人にかゝりてそおはしましけるをみたてまつる人もさはかりいつかしき御身をとものゝ心しらぬけすさへなかぬなかりけり御をくりの女はうはまして夢ちにまとふ心ちして車よりもまろひおちぬへきをそもてあつかひけるむかし大将の君の御はゝ君うせ給へりし時のあかつきを思いつるにもかれは猶ものゝおほえけるにや月のかほのあきらかにおほえしをこよひはたゝくれまとひたまへり十四日にうせ給てこれは十五日のあか月なりけり日はいとはなやかにさしあかりてのへのつゆもかくれたるくまなくて世中おほしつゝくるにいとゝいとはしくいみしけれはをくるとてもいくよかはふへきかゝるかなしさのまきれにむかしよりの御ほいもとけてまほしくおもほせと心よはきのちのそし

りをおほせはこのほとをすくさんとし給にむねのせきあくるそたへかたかりける大将の君も御いみにこもり給ひてあからさまにもまかて給はすあけくれちかくさふらひて心くるしくいみしき御けしきをことはりにかなしくみたてまつり給てよろつになくさめきこえ給風のわきたちてふく夕暮にむかしのことおほしいてゝほのかにみたてまつりしものをと恋しくおほえ給に又かきりのほとのゆめの心ちせしなと人しれす思つゝけ給にたへかたくかなしけれは人めにはさしもみえしとつゝみてあみた仏　くとひき給すゝのかすにまきらはしてそなみたのたまをはもちけち給ひける

いにしへの秋の夕の恋しきにいまはとみえしあけくれの夢そなこりさへうかりけるやむことなきそうともさふらはせ給てさたまりたるねん仏をはさるものにてほ花経なとすせさせ給かた　くいとあはれなりふしてもおきても涙のひるよなくきりふたかりてあかしくらし給いにしへより御身のありさまおほしつゝくるにかゝみにみゆるかけをはしめて人にはこと也けるみなからいはけなきほとよりかなしくつねなきよを思しるへく仏なとのすゝめ給ける身を心つよくすくしてつゐにきしかた行さきもためしあらしとおほゆるかなしさをみつるかないまはこの世にうしろめたきことのこらすなりぬひたみちにをこなひにおもむきなんにさはり所あるましきをいとかくおさめんかたなき心まとひにてはねかはんみちにもいりかたくやとやゝましきをこの思すこしなのめにわすれさせ給へとあみた仏をねんしたてまつり給所　くの御とふらひうちをはしめたてまつりてれいのさほう許にはあらすいとしけくきこえ給おほしめしたる心のほとにはさらになに事もめにもみゝにもとまらす心にかゝり給ことあるましけれと人にほけほけしきさまにみえしいまさらに我よのするにかたくなしく心よはきまとひにて世中をなんそむきにけるとなかれとゝまらんなをおほしつゝむにな ん身を心にまかせぬなけきをさへうちそへ給ひけるちしのおとゝあはれをもおりすくし給ぬ御心にてかくよにたくひなくものし給人のはかなくうせ給ぬることをくちおしくあはれにおほしていとしは　くとひきこえ給むかし大将の御はゝうせ給へりしもこの比のことそかしとおほしいつるにいと物かなしくそのおりかの御身をおしみきこえ給し人のおほくもうせ給にけるかなをくれさきたつほとなき世なりけりやなとしめやかなる夕くれになかめ給ふ空のけしきもたゝならねは御このくら人の少将してたてまつり給あはれなることなとこまやかにきこえ給てはしに

いにしへの秋さへいまの心ちしてぬれにし袖に露そをきそふ御返し

露けさはむかしいまともおもほえす大方秋の夜こそつらけれものゝみかなしき御心のまゝならはまちとり給ては心よはくもとめとゝめ給つへきおとゝの御心さまなれはめやすきほとにとたひ　くのなをさりならぬ御とふらひのかさなりぬることゝよろこひきこえ給うすゝみとのたまひしよりはいますこしこまやかにてたてまつれり世中にさいはいありめてたき人もあひなうおほかたのよにそねまれよきにつけても心のかきりをこりて人のためくるしき人もあるをあやしきまてすゝろなる人にもうけられはかなくしいて給こともなに事につけても世にほめられ心にくゝおりふしにつけつゝらう　くしくありかたかりし人の御心はへなりかしさしもあるましきおほよその人さへそのころは風のをとむしのこゑにつけつゝ涙おとさぬはなしましてほのかにもみたてまつりし人の思なくさむへき世なしとしころむつましくつかまつりなれつる人　くしはしものこれるいのちうらめしきことをなけきつゝあまに也このよのほかの山すみなとに思たつもありけりれいせん院のきさいの宮よりもあはれなる御せうそこたえすつきせぬことゝもきこえ給ひて

かれはつるのへをうしとやなき人の秋に心をとゝめさりけんいまなんことはりしられ侍ぬるとありけるをものおほえぬ御心にもうちかへしをきかたくみ給ふいふかひありおかしからむかたのなくさめにはこの宮はかりこそおはしけれといさゝかの物まきるゝやうにおほしつゝくるにもなみたのこほるゝを袖のいとまなくえかきやりたまはす

のほりにし雲井なからもかへりみよ我秋はてぬつねならぬよにおしつゝみ給ひてもとはかりうちなかめておはすすくよかにもおほされすわれなからことのほかにほれ　くしくおほししらるゝことおほかるまきらはしに女かたにそおはします仏の御まへに人しけからすもてなしてのとやかにをこなひ給ちとせをももろともにとおほししかとかきりあるわかれそいとくちおしきわさなりけるいまははちすの露もこと　くにまきるましくのちのよをとひたみちにおほしたつことたゆみなしされと人きゝをはゝかり給なんあちきなかりける御わさの事ともはか　くしくの給をきつることゝもなかりけれは大将の君なむとりもちてつかうまつり給けるけふやとのみわか身も心つかひせられ給おりおほかるをはかなくてつもりにけるも夢の心ちのみす中宮なともおほしわするゝときのまなくこひきこえたまふ